



謝
 續
 深川集
 完



~ 5
 1922



後編くろ集



このとせの暮新市中は住んで居る流川の町
に福原と申は古来名所の地なりと云ふは
こゝのいづれと云ふも人のいふごとく是れ
いづれの家のいづれと云ふは

志をばらばらと云ふをこのまゝに
志をばらばらと云ふをこのまゝに
志をばらばらと云ふをこのまゝに

心をばらばらと云ふ

樽に心をばらばらと云ふ

山一井雪の如きりや山おぬ

泥芥

あめ

雪の如きりや山おぬ

夕葉

あめ

雪の如きりや山おぬ

友五

雪の如きりや山おぬ

芭蕉

雪の如きりや山おぬ

杉風

雪の如きりや山おぬ

曾良

詩筆

元日やわりの人をそぞろに秋の雪

たせ成

人口

よもに舟は舟もたて舟りて舟りて

石の如く観生あきと山の子秋つと

とて芥は版者何やとあきとある金泥坊

庭の芥もあきとあきと母の庵もあきと

我もあきとあきとあきとあきとあきと

本下世世世世

とて残極くあきとあきとあきとあきと

東門字波の御世んとてこひまゝを遠傳
古巢只あらね形もくまふ傳り那

上野の古寺

せし碑字の羽織をてうくの指す女

杉風生夏衣といはるるの羽織とて送るるを

いそわ我よりぬきぬきとて蝉の音

文籙生出山北傳りてを遠くを安んじて

菊もあつた仲たうと好丸涼しとて

くさるる草もいとまもあつたるなり

杉風々様柔彦より傳て

雪此の縁たり 福みる 月れ 鯉

他風り 悼

日向り 草い ちるる ぬるる

毒海老我系の戸よりて成す所の傳を

何い ちるる 福なり 果ある ちるる

人よ 来をり ちるる

よは 中 ちるる ちるる 果あり ちるる

三味線

こころのちや〜とまや 朽木多き

ふ〜し 甚茶菴を造つ〜と好〜

あ〜と〜や〜の成〜の好〜

歌

こころのちや〜とまや 朽木多き

あ〜の形〜 朽木多き

あ〜の形〜 朽木多き

歌

沽圃

馬菟

三味線さ〜とまや 藤の乞食

夕月お〜とまや 朽木多き

今〜と〜と〜と 朽木多き

こころのちや〜とまや 朽木多き

大〜と〜と〜と 朽木多き

か〜と〜と〜と 朽木多き

あ〜と〜と〜と 朽木多き

自佛堂〜とまや 朽木多き

あ〜と〜と〜と 朽木多き

菟圃 菟圃 菟圃 菟圃 菟圃

得の巻十二巻に古場あり
休見の橋より系此及海を
姉とらるへるるのるを洞蔵
親父とと路を申す
月をの青か仕はより世に好
向中をもちて歸に門をり
隙をれとととるるを路の
つのおいんさふいの様
時のちるふととるるを路の

菟圃 菟圃 菟圃 菟圃 菟圃

菟圃の巻十二巻に古場あり
休見の橋より系此及海を
姉とらるへるるのるを洞蔵
親父とと路を申す
月をの青か仕はより世に好
向中をもちて歸に門をり
隙をれとととるるを路の
つのおいんさふいの様
時のちるふととるるを路の

菟圃 菟圃 菟圃 菟圃 菟圃

新物の一番の妙す
梢の能くも 柚の如く
新のくも年々くく新
まか快くいれぬこりり
不の儀をせぬれあ
田舎れ谷よりなる

圃 全 園 窺 窺

元禄申酉月七日

一奇記

仕着おみをも持りて
松の谷に野を地を
風の吹られ流るる
月見とて尾くも
りりなるくも
るをよ合ちれ田
子とも這する
中中いりしあひ

杉

古鉄 嵐 松隣 曾良 友五 泥芥 盤子 伏水

舞籠の舟は都なり
若返の旅の情をありし由
よこしきるもやあめり所備
か〜比留り〜あめりて
意の角〜やあめり間口
能月袖〜しるはれは〜葉子
強〜る〜にひもる月代
せよ〜いり〜舟〜里〜あめりて
古根〜〜温純〜あめり

夕菊
嵐蘭
古鉄
古丸
杉風
友五
付水
梅隣
曾良

よきぬふなつ〜あめり可なり
傘〜〜海〜不自由
嵐の鳥〜〜あめり獨云
月の影〜〜あめり
空を〜〜あめり
手〜〜あめり
状〜〜あめり
古〜〜あめり
あめり〜〜あめり

嵐蘭
付水
友五
夕菊
盤子
古鉄
付水
曾良
梅隣

ろんけりし出ん猿のもる
 茶を何る借の山口く、娘もちて
 岸句茶く〜世話をや〜人
 君指此屋舎此後見れま〜を何る
 早も別ても村の座〜座
 貧友以そ名に直と念を何る
 ちもたも〜もれいあ〜も
 嘆〜あま〜あ〜も根茶梳
 郵のけ〜ぬ物のは〜も

盤子
 古鉄
 松風
 泥芥
 嵐葉
 夕菊
 付水
 盤子
 曾良

河川茶梳

飾り子い昔あ〜も目れ〜もさよ
 白馬の喰法〜もあ〜も
 ねも〜子をゆすり上揃の茶梳
 情あ〜も〜もあ茶梳
 つらほももや袖つ〜もあ〜の色
 根のちを袂〜も〜もわ〜も
 けあ〜も〜も〜もあ〜も

杉風
 古五
 付水
 泥芥
 盤子
 曾良
 嵐葉

附録

ニホ之文

一 風雅のそとすー 凡世よりニホのそとすーのそとすー
 二 尼を争ひ尼を争ひ尼を争ひ
 三 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 四 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 五 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 六 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 七 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 八 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 九 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 十 尼のそとすーのそとすーのそとすー

一 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 二 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 三 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 四 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 五 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 六 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 七 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 八 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 九 尼のそとすーのそとすーのそとすー
 十 尼のそとすーのそとすーのそとすー

ちをあらうり樂ての傷をあふひ杜るう方すゝる
中へくひの都鄙をかきく十の物をふさ
以君も十の十の物をふさ一能くつ下へは所
はをいほ能

せせ銭小箱

曲ある

一 芭蕉の御授

一 芭蕉の御授

- 一 一室をともおのり新止宿をへくの指下る上
- 一 一室をともおのり新止宿をへくの指下る上
- 一 一室をともおのり新止宿をへくの指下る上
- 一 命をとも事なりわ
- 一 君父の讎言あるものつあきけり屋へんいこ
- 一 踏ぬれ思ふ情あはをぬり
- 一 一室をともおのり新止宿をへくの指下る上
- 一 一室をともおのり新止宿をへくの指下る上

一 事はけ道は親多し人を以て借りて男女の及ぶ
をちるのこ也 後世はすれい人教一なり此の及ぶ
主一に之通りて成物に已をよし者も
一 王のよとの一計一草多し元く山に
もよぬし方多し也

一 山川田畠をよしく辱の及ぶし新り私の及ぶを
しちる也

一 事の作多しありたしきとありしむれを
解し人の作とる事なりしむれは

一 事しる後の事あり

一 一室の及ぶの及ぶをわらそりす人くひきりや世媚論と
なりれ如此人の世の及ぶの及ぶの人にけさるなり
二 事しる及ぶの及ぶを思ふなり 且世の及ぶ御と
いふといぬき事し人く及ぶをわら事なりれを
しきれに跡せしむる事なり

色蕉公論遺語

一 格と入る格をわらむ時いさむる 又格と入る時いさむ

中をたぐる事ありし

一 能登に中人以下此の事誤るを能登平治と此は完
つる能登事。何故平治を正せん爲に能登と此を
之を能登と誤るは能登に平治の事禁めらる
るこゝろをとり下上民の事とて能登を
なり唐羽すへく中集に直家傑も愧るこゝろ能
と能登能と誤るは能登と誤

一 能登に中人以下此の事誤るを能登平治と此は完
つる能登事。何故平治を正せん爲に能登と此を
之を能登と誤るは能登に平治の事禁めらる
るこゝろをとり下上民の事とて能登を
なり唐羽すへく中集に直家傑も愧るこゝろ能
と能登能と誤るは能登と誤

安美吉柳の少も。たゞ。如。折。能登の
り。能登の事あり。能登の事あり。能登の事あり。
能登の事あり。能登の事あり。能登の事あり。
能登の事あり。能登の事あり。能登の事あり。

心上

たゞせ能



